

金 (gold) の歴史

比較文化 (福田真人)

「不変」の性格を持つと信じられた「金」は古代から人々を魅了し続けた。古代エジプトでは、「黄金」は太陽光の輝きを示すと考えられた。古代エジプトの第18王朝ツタンカーメン王の墓からは黄金のマスクのみならず、棺そのものも金でつくられており3000年余りたっても、「黄金」の輝きは衰えを見せていなかった。

エジプトは金とかかわりの深い国です。ファラオの時代から「金は高価で尊いものである」として珍重してきました。珍重するあまり、金は神が王に遣わしたものだとして、一般市民が金のかけらを持つことさえ禁じました。国民はたとえわずかでも、全てファラオに差し出すものと決められていたのです。

こうして集められた金が、王の金の棺やマスクにと加工されていきました。当時は砂金採りの手法で集められていたにもかかわらず、集められた金は莫大な量にのぼります。例を挙げるなら、ツタンカーメン王の眠る棺の金の使用量は110kg。もしも1グラムを2500円と計算した場合、2億7500万円という途方もないもの。

「黄金」を求める人間の「欲望」はその後も求め続けられました。1848年、カリフォルニアで「金鉱」が発見されると、翌年から「ゴールドラッシュ」が始まった。カリフォルニアで最初に発見されたのはサクラメント川の砂金でしたが、やがて「黄金」の大鉱脈が発見され、多くの人々の欲望の嵐を巻き起こし「ゴールドラッシュ」は大量の通貨の発行を可能にし、世界経済の規模拡大を可能にした。

1970年の金本位制の廃止により金の通貨としての役目は終わったが、世界の金の約45%は各国政府や中央銀行により外貨と同じように準備資産として保有されている。

古代七金属の一つである 金 (地中の太陽と言われる金属。ラテン語で「朝の光の色」を意味) は、現在では単にその美しさから アクセサリーの地金などとして使われたり、また、他にも様々な用途で使われているが、昔は名誉や富、魔よけやお守り、幸福への願い、治療薬として様々な病気に用いられたという金の歴史がある。

(※金は、心身のバランスを整えて、優れた浄化力であらゆるものを純粋に洗い流すことができ、また、血液の循環を良くして神経系統を強くし、肉体すべての調整に関する症状を改善するのに用いられてきました。)

特に、ゴールドのアクセサリーのその普遍性は、永遠の富と権力の象徴とされ、太古の昔から権力者の装身具の素材として使われてきました。金は、人類が最

初に発見した金属（※7000年前のエジプトの石器時代には既に用いられていました）で、そして最初に用いた金属で、天然では自然金（※金の種類には山金と砂金の2種類があり、山金は鉱山から自然金として産出され、大半は銀分などを含んでおり、金の純度は低くなり、砂金は川床や海岸の砂中から発見されるので、漂流中に銀分が溶けて、純度が高くなります。）として塊（かたまり）で産出され、特に加工技術がなくても簡単に使えたので、広く知れ渡ったと考えられている。

昔から権力者に慕われ、また冒険家であるマルコポーロやコロンブスなども黄金を求めて、大航海に乗り出したり、お祭りごとに使われたりし、また、日本でも紀元前1世紀ごろに伝えられて広まりました。（※日本では、後漢の光武帝が倭国の使者に金印を贈った辺りから広まったと言われていています。）他にも昔から世界各地で言い伝えやイソップ話などの寓話（ぐうわ）が多いことでも知られています。（※”王様の耳はロバの耳”で有名なミダス王が、太陽神アロンによって、触るものが何でも金になるという、地獄の幸せを与えら、その結果、自分の娘に触ったとたん娘は金に変わってしまいました。）

インカ帝国というアンデス山脈に居を構えた巨大な国家を支えていたのが、金の採掘。しかし、豊富な金を求めるスペインによって攻めほろぼされた。その際にインカの王が自分の助命嘆願として差し出した金の価格は、今の価格にして数十億円と言われているから、インカ帝国がどれほど豊かであったか想像がつく。

しかし、スペイン側は金を受け取りながらも王を許さず、さらに有名な太陽神殿やその他の寺院なども、全て奪いつくした。ただ、その莫大過ぎる量（一説に5トンとも）が一気にヨーロッパに流通したおかげで、インフレを引き起こし、スペインの国力を弱めることになってしまった。歴史の皮肉。

金というのは希少性の高い金属。なにしろ、金の埋蔵量は極端に少なく、1トンの金鉱石から3グラムも取れば上出来。そこで、中世ヨーロッパでは他の金属から金を生み出す研究が盛んに行われました。これが有名な錬金術（alchemy）。残念ながら、金を作り出す事はできませんでしたが、錬金術から生まれたさまざまな技術が、現在の科学の始まりとなっているのです。

慶長6年（1601）

鶴子銀山の山師3人が佐渡金山を発見し、六拾枚、道遊、割間歩を開く。

徳川家康、伏見城にて大久保長安に佐渡金山の支配を命ずる。

元和6年（1620）

佐渡金山大いに栄える。年間の生産量248千両。

元和 7 年(1621)

佐渡で小判の製造を開始する。

承応 2 年(1653)

排水のため水上輪（手回しポンプ）の使用を開始する。

正徳 4 年(1714)

佐渡金山産の銅で銅銭を鑄造する。

安永 7 年(1778)

最初の無宿人 60 名が江戸より送られ、水替人足としての使役が始まる（幕末まで続く）。

明治に入ると、新政府は明治 2（1869）年、他鉱山に先駆けて佐渡鉱山の官営化を決め、西洋人技術者を招いて近代化に着手します。さらに明治 18（1885）年には、当時の鉱業界の第一人者、大島高任を初代佐渡鉱山局長に迎え、更なる近代化と拡張が図られました。この過程では国内初の西欧技術が数多く佐渡鉱山で実地に使われ、近代化の模範鉱山となりました。明治 23（1890）年には鉱山学校も開校し、当時最先端の鉱山技術を授けたほか、他鉱山からも研修希望者が多く、近代化を担う技術者の養成にも貢献しました。

明治 3 年(1870)

英人技師の指導により洋式の製鉱場建設を開始する。

明治 8 年(1875)

第一次の近代化がほぼ完成する。ドイツ人技術者の指導により日本最初の洋式立坑である大立堅坑の掘削を開始する（明治 11 年完成）。

明治 22 年(1889)

佐渡鉱山が皇室財産となり、宮内庁御料局所管となる。

明治 29 年(1896)

入札により民間へ払い下げ。三菱合資会社の所有
平成元年(1989)

鉱量枯渇により採掘を中止する。